

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2012.09) 平成21年度:80～83.

ACTION Programからの報告

鬼塚直樹、Jeffrey S. Mandel、大野稔子、最上いくみ、石
上 香

ACTION Program からの報告

鬼塚直樹
Jeffrey S. Mandel
大野稔子
最上いくみ
石上 香

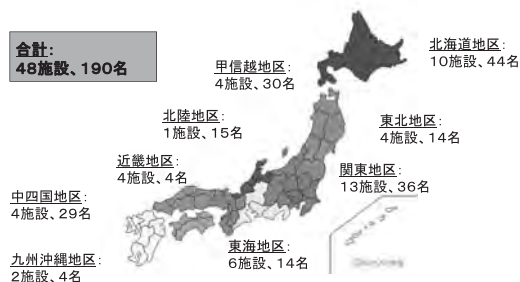
UCSF
UCSF
北海道大学病院
札幌医科大学附属病院
旭川医科大学病院

ACTION のHistory

- 1997年にエイズ予防財団とUCSFの協力により発足
- AIDS Care Training for International Organization of Nurses の頭文字をとってACTIONと命名
- 平成20年度末までに、36回の研修を行ない、190名の看護師さんが参加された
- 平成21年度には参加者総数が200名を越える

ブロック別の参加人数・施設数

合計:
48施設、190名



研修の概要

- 医療機関実地研修
カイザー病院HCONクリニック
- 講義
海外研修の目的 / サンフランシスコのエイズケアシステム
慢性疾患のセルフマネジメント
- ワークショップ
ヒューマン・セクシャリティ / エイズ101
行動変容を支援するカウンセリングのスキル
HIVと倫理 / HIVとケースマネジメント
HIVケア提供者の心理問題
- 訪問研修
APIウェルネスセンター / ワールド
- その他
研修のまとめとアクションプランの作成

研修の理念

- アメリカの保険・医療体制の概要を理解し、それにのっとり提供されているHIVケアの本質的な理解を目指す
- サンフランシスコにおけるHIV看護の特殊性や地域性を、歴史や背景とともに理解し、そのなかから地域を越えた普遍的なコンセプトを抽出する
- その普遍的なコンセプトを元に、日本の現場におけるHIV看護の質的向上に取り組むための活発なディスカッションを誘発する
- そのディスカッションを元に、研修終了後にそれぞれの現場において取り組むアクションプランを作成し、参加者全体でシェアする
- 毎年行なっている札幌スキルアップセミナーなどを通しての生涯サポート

質問事項

1. ACTION研修の全体的な印象を書いてください
2. 研修の主なポイントごとの印象を書いてください
3. 日本に帰ってからあなたの看護全般にどのような影響を及ぼしましたが
4. ACTION研修を他の看護師さんに勧めたいですか、勧めたくないですか、その理由も書いてください
5. ACTION研修の今後に期待することを書いてください(地域の看護が抱えるさまざまなニーズを考慮に入れて)

1. ACTION研修の全体的な印象を書いてください

キーワード

- (サンフランシスコにも)偏見と差別が存在した
- 文化の違い、歴史の違い
- 学びやすい環境
- 看護師がコーディネーターの役割
- 専門医療
- チーム医療
- プログラムの全体像の理解
- 普遍性と地域性
- 個人レベルの健康
- 単純比較は困難
- 看護理念は同じ
- スケジュールにゆとりが
- 感染管理看護
- 予防啓発
- 斬新的なケア
- ボランティアやNGOからの支援
- 参加型のプログラム
- 日常からかけ離れた2週間
- HIVケアの先進国であるアメリカ
- 自分たちの活動を肯定評価
- 行動変容と問題解決志向型
- 人としての尊厳や平等の権利
- 職種が独立協力
- トリアージ
- 院内外の連携
- NGOと行政と医療機関の関係

1. ACTION研修の全体的な印象を書いてください

これらのキーワードは次の3点に整理できた

- A. サンフランシスコの現状への印象
- B. プログラムの内容への印象
- C. 看護自体への印象

A. サンフランシスコの現状への印象

- サンフランシスコにも差別や偏見が存在したということに驚きを感じながらも、1981年エイズ勃発以来大きな苦しみの中から弱者を守ろうとする理念の中で構築された看護の歴史の重みを感じた
- ボランティアやNGOの活動が患者を支えているという現状を見て、看護と地域社会との連携の大切さを実感した
- 患者や感染者のエンパワメントが、彼ら自身の自発的な社会貢献を生み出しているという現状が印象的だった

B. プログラムの内容への印象

- 学びやすい環境が提供され、段階的にシステム化された研修内容が構築されており、日常を離れた環境でゆとりを持って学ぶことができた
- 参加型のワークショップが多くあり、非常に興味深かったし、帰国後の取り組みに役に立った
- 文化や歴史の違いを考慮し、その中にある地域性を越えた普遍的なものを選び取るという作業を常に行うようという研修理念と、それに沿った指導によって、より深い学びが可能となった

C. 看護自体への印象

- 医療チームのメンバーがそれぞれの専門性を尊重し、同じ目線で参加しており、その中で看護師の役割が大きいのに驚きを感じた
- 医療現場で、職種は違っても誰もが活き活きと働いており、そのケアのエネルギーに感服した
- 患者や相談者と一番最初にそして深く関わる看護師の役割を再認識し、医師の決定に従って看護を行っていくという概念が崩れ、診療へのトリアージ、実際のケア、社会資源へつなげるといったコーディネーターの役割の重要性を実感できた

3. 日本に帰ってからあなたの看護全般にどのような影響を及ぼしましたか

キーワード

- HIV看護のベース
- 人脈ができた
- 看護の視野が広がった
- 活動範囲が広がった
- 計画の立案と評価
- 看護の基本気づいた
- 専門職の配置
- HIV看護は特別のものではない
- チーム医療への取り組み
- 他職種との連携
- 表面化されない問題
- 倫理原則に照らし合わせる
- セクシャリティーの受け入れ
- カウンセリングのスキル
- 病棟カンフェランス
- 在日外国人の不便さ
- 患者さんをありのまま受け入れる
- 他人の力を借りてケアをする
- 人を診るということ
- ボランティア活動に関心
- ハームリダクション
- 共感的アプローチ
- 不平等な医療
- 人間の尊厳を保つ

3. 日本に帰ってからあなたの看護全般にどのような影響を及ぼしましたか

これらのキーワードは次の3点に整理できた

- A. ネットワークと連携
- B. 看護の基本的な視点
- C. カウンセリングのスキル

A. ネットワークと連携

- 他職種との連携の中で看護の役割を再認識し、それを発揮するためのシステム作りへのモチベーションにつながった
- 人脈が広がる中で、自分自身の視野も広がった
- チーム医療の実現に向けて、まずはケースカンフェレンスの重要性が理解できた

B. 看護の基本的な視点

- 患者の全体像の把握の仕方がより多角的になり、自然とその人を人間として尊重する意識が生まれた
- セクシャリティを学ぶことによって、患者のあるがままの姿をより自然に受け入れる力が身についた
- HIVに限らずどの疾患にも必要なケアやシステム作りの必要性を感じた

C. カウンセリングのスキル

- 患者の個性をそのまま受け入れ、患者が今何を感じているのかを知ることの大切さを学び、日々の看護に取り入れるようになった
- ハームリダクションや共感的アプローチという基本的な姿勢を学ぶことによって、表面化されていない問題の把握に努めるようになった
- 患者の思いを汲み取ることができるようになり、それに伴ってケアをしたいという気持ちが強まった

これからの展望

質問事項5をふまえながら

- 文化や歴史あるいは医療・保険機構の違う環境中で、HIV医療に触れることによって、より明確に自分たちの置かれた現状を把握でき、そこからさらなる展開をはかることが可能となるのではないかと、という海外研修の目的は果たされてきていると思われる
- しかし研修参加からの時間軸が長くなる中、海外研修を再度受講したいという声も聞かれた
- また中核拠点病院を研修対象とする必要性や、同等の研修内容を可能な限り日本で提供することによって、より多くの参加者を確保できるのではないかと、という指摘もあった

これからの展望(続き)

質問事項5をふまえながら

- HIV諸相の変化(患者の高齢化など)に伴う多様化した問題にフォーカスした研修内容の構築が必要
- プリセプターシップなどを取り入れた応用編の導入により研修に幅を持たせる必要がある
- HIV感染予防を目的とした介入(検査機会の拡大)などへの取り組みを地域社会のと連携でどう実現させていけばいいのか、といった問題への研修内容の拡大が望まれている

まとめ

- HIV治療に関し、日米間に違いは見られず、また病を得た人へをケアするという理念にも、大きな違いがあるとは思えない
- しかし、文化や社会機構の違いの中で、日々現場における看護にはそれぞれの特色が現れているように思われる
- 患者の高齢化やドラッグ使用の絡みなど、HIV看護は新たな側面を表し続けてきている
- その中で、研修のフォーカスを絞り込んだ新しい形態の研修プログラムの開発が急がれている
- 海外実地研修という利点をフルに活用し、重層的な研修プログラムの構築に取り組んでいきたい

連絡先

鬼塚直樹 Naoki Onizuka
HIV Prevention Specialist
Global Health Sciences
University of California, San Francisco
nonizuka@webjapan.us